

第25回 同窓会クリスマス礼拝

「乳飲み子がしるし」——ルカによる福音書2章8〜21節

青山学院大学宗教主任 国際マネジメント研究科教授 島田 由紀

「飼い葉桶に寝ている乳飲み子」が「救い主」であり、私たちへの「しるし」だと言われます（12節）。たびたび強大な帝国によって蹂躪され救いを待ち望んでいた神様の民、そしてすべての民を救うはずの救い主が、なぜ、「乳飲み子」というか弱い姿で来られたのか。ルカによる福音書は確かに、このことをとても大切に美しく描いています。

乳飲み子の両親は強制された旅の途中におり、宿屋には泊まる場所がありませんでした。救い主である乳飲み子には、この世に居場所がなかった。また、救い主の誕生という喜びの知らせを最初に知らされた羊飼いたちは、暖かい家と村のコミュニティから外れて夜を過ごしていました。

御子をこの世に送られる神様は、名もなき場所の名もなき人々を、けっし



て忘れてはおられないので、やがて「神の御国」を教え説き始められた

主イエスは、寄る辺なき人々に出会われ、深く憐れまれて、癒し、教え、招き、ともに食卓を囲まれました。来るべき御国において神様は、そのような人々のためにこそ、場所を空けて招いておられるのです。飼い葉桶の御子の姿は、小さき者一人ひとりが、神様によって大切に守られながら、互いに気遣いあう神様の御国を指し示していました。

西暦1世紀、ローマ帝国は地中海全体で「ローマの平和」と呼ばれる繁栄を享受し、皇帝アウグストゥスは「救い主」と称されました。しかし、「ローマの平和」とは実に、武力で人々を圧倒し沈黙させるものでした。神様の御子は、まさにこのローマ帝国の足元で、どことも見えない飼い葉桶へとお生まれになりました。

「いと高き所には栄光、神にあれ 地には平和、御心に適う人にあれ」(14節) 飼い葉桶のか弱き御子は、いと高きところにおられる神様を真っ直ぐに指し示し、神様だけがすべての力の源であり栄光が帰されるのだと教えます。私たちが、神様のみにあらゆる力と栄光をお返ししたいと願うときに、地に生きる私たちの間に御子の平和がもたらされるのです。

「神はわれらと共におられる」。飼い葉桶の御子、平和の君を私たちのうちに迎え入れ、恐れることなく歩んでまいりたいと願います。

礼拝ご報告

2025年11月28日青山学院のクリスマス・ツリーが点灯されると短大同窓会のクリスマス礼拝まで時の流れが一気に加速するように感じます。

12月13日短大礼拝堂において、河見誠先生(元短大校長)、趙慶姫先生(元短大副学長)と共に149名が降誕礼拝の恵みに与りました。ハンドベル・クワイアのベル・ノートによる奉鐘、松浦光子先生(大学オルガニスト)による奏楽、説教は島田由紀先生(大学宗教主任 国際マネジメント研究科教授)に

「乳飲み子がしるし」と題してみ言葉を取り次いでいただきました。先生が社会で初めて出会われた短大卒業生の印象を交えながらメシア降誕のメッセージをわかりやすく語ってくださいました。社会からはじき出されていた羊飼いたちが天使の告げたしるしを目当てに飼い葉桶の乳飲み子を捜し当てた時その貧しさ、不憫さといえは現実的には悲惨ですが、その小さなしるしこそどれほど大きな神の恵みだったか、人の想像を超えた神の栄光が溢れていたことか。わたしたちも日常生活で困難や苦境のとき神さまを通してしるしを見出すこ

とがあります。そのしるしを大切に受けとめながら生かされたいと思います。



お捧げいただきました席上献金に心から感謝いたします。これからも主にあって共に喜びを分かち合えますように。また財政が逼迫している状況の同窓会を憶えて支援してください。皆さまからの年会費により行事が開催できることを重ねて感謝いたします。今年も短大礼拝堂でクリスマス礼拝を開催できることを願いつつ多くの皆さまと福音の恵みと力を共にできればと思います。

事業部 56C 小澤 美幸

献金の送り先 (2025年度)

合計 117,170円

①日本キリスト教婦人矯風会	21,170円
②被災支援ネットワーク・東北ヘルプ	12,000円
③日本ののちの電話連盟	12,000円
④共働学舎	12,000円
⑤ラファエル会	12,000円
⑥興望館沓掛学荘	12,000円
⑦アジア学院	12,000円
⑧アジアキリスト教教育基金(ACEF)	12,000円
⑨GLOBE JUNGLE	12,000円